

岐阜県中津川市付知公民館における子どもたちと地域住民との協働による 「命を守る訓練」の実践 ～公民館による子どもを核とした地域づくり～

伊藤あゆみ¹⁾ 益川浩一²⁾

¹⁾ 付知公民館（付知町まちづくり協議会）（〒508-0351 岐阜県中津川市付知町 4956-43）

²⁾ 岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1）

1. はじめに

中津川市付知公民館は、平成30年度から指定管理者制度導入により、付知町まちづくり協議会が運営管理を行っている。

指定管理者制度導入のメリットは、公民館活動もまちづくり活動も「人づくり・つながりづくり・地域づくり」が基盤となっており、双方の特性を生かしながら、より地域に密着した活動を行うことができていることである。また、まちづくり協議会事業も公民館事業も協働の取り組みができることとなった点が最大の強みになっている。

付知公民館では、「子どもを核とした地域づくり」として、地域で取り組む子育ての推進を軸に、子どもたちを中心とし、さらに地域住民も巻き込みながら様々な活動を行っている。また、地域住民のみならず、警察署（交番）や消防署等にも協力をいただいている。

本稿では、様々な取り組みの中から「命を守る訓練」の取り組みを取り上げ、報告する¹⁾。

2. 訓練のきっかけ

付知町まちづくり協議会では、平成22年から付知中学校3年生と地域住民との「意見交換会」を実施し、付知町の良いところや将来期待することについて等、中学生と地域住民との懇談を行っている。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災の際に、岩手県釜石市において、隣接する小学校・中学校・地域住民が助け合って高台へ避難し、当時、そこに居た全員が無事に避難できたという、後に「釜石の奇跡」と呼ばれることとなった避難の様子が様々なメディア等で取り上げられていた。

地域ぐるみの防災教育の取り組みを計画する中、平成24年の「意見交換会」の中で、「釜石の奇跡」を知った付知中学校生徒から、付知中学校と付知保育園も隣接しており、自分たちにも同じような連携ができるのではないかと提案がなされた。これを受け、中学生が地域住民の一員として、保育園児や地域の高齢者の方たちと避難ができ、なおかつ、幼少期から防災意識を身に付け、自助・共助・公助の意識を高める訓練ができるよう、地元の消防署や警察署、付知中学校、付知保育園と協議を重ねた。その結果、平成25年から「命を守る訓練 付知保育園・付知中学校合同避難訓練」が開始された。

また、付知地区で過ごす概ね12年間（保育園～中学校）でより一体的な防災意識の向上を図るため、平成28年から付知南小学校、平成30年から付知北小学校でも5・6年生を対象とし、子どもが協力して困難を乗り越えることの大切さを体感できるよう、「命を守る訓練 5・6年生防災体験」も開始した。

さらに、中津川市では、各地区に防災士の配置を推奨しており、付知地区にも約30名の防災士が居るが、各々個別の活動にとどまっており、訓練への協力を個別に依頼していた。上記の訓練開始を受けて、各々での活動ではなく、付知地区として防災士会を立ち上げ、組織的に活動をしようということになり、令和2年に「つけち防災士会」が設立された。

この訓練を10年間継続することで、今の保育園児は中学生になり、20年間実施すると親の世代となる。10年20年と継続して実施することで、子どもたちの心の中に防災への関心や弱い立場にある人々への心遣いが芽生え、将来災害が発生してもお互いに助け合って災害を乗り越えることができる強いまちになることを目指すとともに、こうした「人づくり」が「まちづくり」に繋がっていくよう、継続して活動を進めている。

この訓練初年度に中学生に手を引かれて避難した園児が、令和4年の付知中学校3年生の生徒となる。その生徒たちが、今度は保育園児の手を引く側になることで、保育園・小学校・中学校での体験を重ねた一連の流れがようやくできあがる。これがゴールではなく、この訓練の本当の意味でのスタートをきることでできるところまで辿りついたということである。

この訓練の実施主体は、地域住民を巻き込んだ「命を守る訓練実行委員会」であり、本委員会によ

って、訓練や体験が実施されており、地域全体での取り組みとなっている。

3. 実践事例

3-1. 命を守る訓練 付知保育園・付知中学校合同避難訓練

本訓練の令和3年度のプログラムは、以下のようになっている。

<表 1. 令和3年度のプログラム>

【想定】	
阿寺断層帯直下型地震 マグニチュード7、最大震度5強	
【実施内容】	
10:35	中学校3時限目開始
10:40	地震発生。緊急地震速報を受け、保育園・中学校それぞれ机の下に身を隠す。
10:42	地震が一旦収まり、園庭・グラウンドにそれぞれ避難を開始する。
10:45	それぞれ全員の無事を確認。
10:47	建物の安全確認を行い、中学校体育館及びB&Gアリーナに異常発生。 安全確認が取れた中学校南側のグラウンドへ避難を決定。
10:48	保育園からの避難支援要請を受け、3年生は保育園へ向かう。
10:50	保育士の指示を受け、中学生が保育園児と手をつなぎ中学校グラウンドへ誘導。
11:00	一旦手をつないだまま、グラウンドに整列し、保育士が園児全員の避難確認を行う。 避難確認終了後、園児は帰園。
11:02	中学生はアドバイザーから訓練講評を受ける。
11:05	訓練終了あいさつ（実行委員長）

付知地区は、阿寺断層があるため「阿寺断層直下型地震を想定」し、訓練を実施をしている。園児・生徒だけではなく、教職員も一緒になり避難訓練を行う。この訓練のポイントは、インフラが機能しない状況を想定し、保育士が中学校まで走り、中学校長へ避難支援要請を行うところにある。実際の状況に近い形での訓練を重ねることで、子どもたちはもちろん、教職員も子どもを預かる立場として役割分担をしておくことで、とっさの行動が可能になると考えられる。また、保護者にも同じように実際に近い形で、子どもたちの保護者引き渡しを体験できるよう、令和元年は、この訓練終了後、「町内一斉保護者引き渡し訓練」が行われた。それまでは、各園・学校別々で行われていた保護者引き渡し訓練が町内一斉となったことで、保護者自身も緊急時の自分の動きを確認することができるようになった。

この訓練での地域住民の役割は、交通整備、記録係、見守りとなっている。生徒は園児に「大丈夫だよ。」「安心してね。」等の声掛けを行い、園児は泣くこともなく、中学生のお兄さんお姉さんを信頼し、ぎゅっと手をつないで避難する姿に、地域住民はいつも感心させられている。



保育園の要請で保育園に向かう中学生（写真1）



中学生と園児の避難の様子（写真2）

3-2. 命を守る訓練 付知北小学校・付知南小学校5・6年生防災体験

本体験の令和3年度のプログラムは、以下のようになっている。

<表2. 令和3年度のプログラム>

【6年生】							
13:50~14:00	14:00~14:40	14:40~14:55	14:55~15:00	14:00~15:15	15:15~15:30	15:30~15:35	
体験説明	段ボールパーティション設置体験	・新聞紙スリッパ ・簡単マスク	休憩	初期消火訓練	消防車再見学	講評	

【5年生】							
13:50~14:00	14:00~14:20	14:20~14:30	14:30~14:50	14:50~15:05	15:05~15:10	15:10~15:25	15:25~15:35
体験説明	ハイゼックス袋詰め作業	大鍋に投入	初期消火訓練	消防車再見学	休憩	・新聞紙スリッパ ・簡単マスク	・ハイゼックス米配布 ・講評

小学校での「防災体験」は、全ての体験の講師を地域住民に担ってもらっている。

体験内容は、5年生はハイゼックス（災害救助用炊飯袋）を使った「非常食炊飯体験」をメインにして行っている。日赤奉仕団、交通安全協会、女性防火クラブの皆さんを中心にグループごとに分かれ、講師の指導の下、全員で100食分のハイゼックス米を作る。これは、5・6年生、教職員、当日の講師・スタッフ等関わった方全てに持ち帰ってもらい、児童が自宅へ持ち帰り、家族と体験したことの話しながら試食してもらうことが狙いである。

6年生は、段ボールを使った「段ボールパーティション設置体験」をメインにして行っている。6年生に対しては、つけち防災士会が中心となり指導をしていただき、普段使うことがない段ボールカッターを使用し、児童と一緒に取り組んでいる。

そして、全児童が中津川北消防署による初期消火訓練、付知消防団による消防車両の見学と体験、実行委員による新聞紙スリッパとキッチンペーパーで作る簡単マスク作りを体験した。

訓練の後には、参加した地域住民、スタッフ、児童、教師等に感想や要望等を提出してもらった。その中で、開催時期が夏ではなく秋以降に開催ができるようであれば、プールの水を使い、実際に放水体験ができないかとの意見が出された。このように、関わった方から意見が出てくるのがとても大切なことだと考えられる。



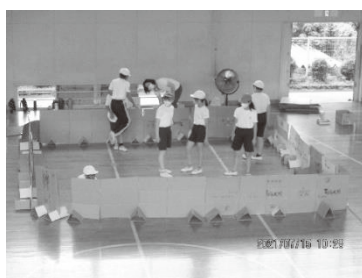
5年生非常食炊飯（写真3・4）



5年生水消火器訓練（写真5）



6年生段ボールパーティション設置（写真6・7）



6年生消防車両見学（写真8）

3-3. 令和4年度の新たな試み

中津川市では、令和5年度に全地区にコミュニティ・スクールの導入を目指しており、令和3年度、4年度はモデル校にて実証実験が始まっている。その中で、令和4年度のモデル校が付知地区に決まった。学校から「付知北小学校と付知南小学校が合同で何かできることはないだろうか。」との声があり、命を守る訓練を合同で開催することとなった。全学年を合同で開催するのではなく、令和4年

度は6年生を対象とした訓練を合同で開催することとした。また、4年生を新たに追加し、各小学校「4・5年生防災体験」として開催することとした。

付知地区においては、すでに地域学校協働活動は進められており、両校、つけち防災士会、付知公民館で協議を重ね、6年生は「避難所に特化した内容」で計画。実際の避難所を知らない児童に対し、「避難所とはどんなところだろう。」ということ学ぶことから計画。つけち防災士会の方で実際に石巻市にボランティアへ行かれた方のお話を聞き、実際の記録写真も見せていただく事前授業をそれぞれの学校で実施した。

この授業の中では、大きなテーマを児童に与えるのではなく「自分事」として考えることに重点を置き、避難所で特別な配慮が必要な方が困ることとして、①赤ちゃんがいる家庭、②高齢者の方の2つのテーマに絞り、各家庭で話し合っ、その方たちが困ることを考え、困ることに対して自分には何ができるのか、どんなことができるのかを考えてもらう授業を実施した。その考えを当日、グループワークで発表をすることとした。そして最後に、自分たちにできることを実現するために、普段からどんなことを心がけて生活していくのかを「私たちの頑張り宣言」としてまとめてもらうことも計画した。また、実際に中津川市で使用されているパーティションも児童たちに設置をしてもらい、避難所のイメージをより具体的に持てるようにした。その他、中津川北消防署による緊急時に生かすことができる三角巾法と毛布を使った担架の作り方も学ぶこととした。

ところが、開催日前日にコロナ関係の問題が起き、両校と一緒に開催することが難しい状態となつてしまい、苦渋の決断だったが、令和4年度は各校それぞれでの実施とすることとなった。

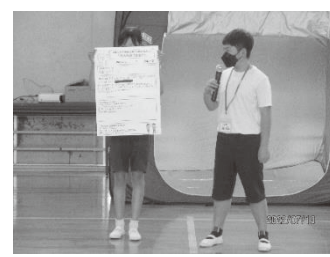
地域住民も各グループに参加し、子どもたちと一緒にグループワークを行った。体験型ではなく、ワークショップ形式にすることで、防災に関して考え学ぶことはもちろん、地域住民とのふれあいの時間にもなり、とても有意義な時間となった。



事前授業 (写真9)



グループワーク (写真10)



私たちの頑張り宣言 (写真11)

また、令和4年度は新たに4年生も加え、4年生は「地震に特化した内容」、5年生は「消火に特化した内容」で開催を計画した。

4年生は教科書に沿った内容とし、「地震に特化した内容」の中で特に大切だと考えられる「転倒防止対策」等の事前対策の大切さを学ぶ内容とした。事前対策の大切さを学び、実際に学校ではどんな対策ができていないのか、対策ができていないところはどんな対策をするべきかをスタッフの地域住民と一緒にグループごとで学校内の点検を行った。4年生を対象とした授業は初めての試みだったが、授業時間の一環として、校舎内で児童と地域住民と一緒に学び合う姿がとても印象的で、一つの目指すべき姿がそこにあったと感じることができた。



地震速報が鳴った時の児童の行動 (写真12)



地域住民と児童による学校内の点検 (写真13)

5年生は「消火に特化した内容」で計画された。非常食炊飯体験 (ハイゼックス米)、水消火器訓練、消防団の可搬のホースを実際に使った放水体験を通して水の大切さを学ぶ内容とした。令和3年度に意見が出された放水体験を取り入れることで、子どもたちも実際の放水の威力を体験することができ

た。また、3年振りに煙体験も取り入れ、火災の際の注意点を学ぶことができた。



放水体験（写真14）



煙体験（写真15）

4. おわりに

「命を守る訓練」を通して、保育園では助けられる側・守られていることを体感し、小学校では助け合うことの大切さを体感する。そして、中学校では地域の一員として人助けをすることの大切さを体感する。そのどの活動・学習にも、地域住民がスタッフや講師として関わることで、防災意識の向上や人への心遣いの他に、地域や地域住民との横の繋がりができ、継続していくことで「人づくり・つながりづくり・地域づくり」に繋がっていくと考えられる。

子どもを核とした活動を含め全ての公民館活動は、明日、明後日に即時的に成果・効果があらわれるものではなく、3年5年10年と継続していくことで、ようやく成果・効果が見え始めるものだと思う。

地域での体験を通して、子どもたちが地域を「見て・聞いて・知る」、そして地域住民と触れ合うことで地域に愛着を感じてもらおう。その中で、子どもたちが「将来、付知に残りたい。付知に帰りたい。」と思えるような取り組みを仕掛けていくことが、公民館職員の役割、地域の大人の役割だと考える。今後も地域が一つとなり、子どもたちを核とした地域づくりに力を注いでいくことが必要である。そして、参加の少ない30～40歳代の親・保護者の世代も巻き込むことができる活動を増やしていくことが大事であるとする。

注)

1) 以下の報告は、付知公民館及び付知町まちづくり協議会の各種資料に基づいて構成されている。